旭ヶ丘小

共に考え、創る学びの実現

～学ぶ基盤づくりを通して～

（３年計画の１年次）

校長　　中奥　尚子

１　研究主題について

本校は、教育目標を「生き生きと　心も体もたくましく」と定め、子どもの明るい声が響き、学力・思いやりの心・体力・生活力を確実に育てる学校を目指している。昨年度までの３年間は、教育目標、これまでの研究経過と、「主体的・対話的で深い学び」という授業改善の視点を踏まえ、研究主題を「関わり合いながら深く考える子の育成」と設定し研究を行ってきた。

昨年度は、児童の追究意欲を喚起する課題の設定と、思考と対話の機会の保障に取り組んだ。具体的には、「～しよう」という課せられためあてではなく「～はどうすればよいか」といった児童の疑問を基にした学習問題を児童との対話の中で作成したこと、４つの視点（学習課題の設定・言語活動・対話・振り返り）を基にした授業づくりを行ったことで、学習問題について深く考えさせ、研究主題である「関わり合いながら深く考える子の育成」に迫ることができた。また、特別支援的な視点での児童理解に関する研修を重点的に行うことによって、児童理解に基づいた効果的な支援がなされるようになった。

しかし、児童は課題解決に向けて意欲はもっているものの、自分の考えを書いたり、話したりする技能が十分に身に付いておらず、対話による学びの深まりが難しい傾向が見られた。また、課題を発見しようと自分と向き合う、粘り強く取り組む、自分や仲間の成長を認めるといった、学習に向かう態度についても課題が残った。これらのことから、授業づくりや指導方法の工夫だけでなく、言語能力や学習に向かう態度を含めた、学習の基盤となる力を身に付けさせることで、主体的に課題に向かい解決できる児童の育成を目指す必要性が確認された。

そこで今年度からは、「共に考え、創る学びの実現」を研究主題とし、自他共栄のもと、主体的に課題を発見し、解決に向かって創造的に挑戦できる児童の育成を目指すこととした。３年計画の１年次となる今年度は、「共に考え、創る」ために必要となる技能や態度を「学習の基盤となる力」と位置付け、それを身に付けさせる手立てや指導方法を模索することを目標とする。また、創造的に挑戦できる児童を育成するためには、教師が創造的に挑戦できることが必要である。そのため、教師一人一人が研究に対して目標をもち、仲間と協力して課題の解決に取り組める研究体制を構築した。これらの試みにより、児童と教師が共に成長し、学習の基盤となる力が育成され、「共に考え、創る学び」の実現の基礎が整えられると考える。さらに次年度以降は、児童が身に付けた学習の基盤となる能力を生かし、「共に考え、創る学び」を具体的に実現していくことを目指す。

２　研究のねらい

「共に考え、創る」ための学習の基盤となる力を児童につけさせる手立てや指導方法について、日常の実践を通して明らかにするとともに、教師が創造的に挑戦できる態度を高める。

３　研究仮説

学習の基盤となる力の育成について教師が主体的かつ日常的に取り組める研究体制を構築し研究を進めていくことで、児童に学習の基盤となる能力を付けさせるとともに、進んで挑戦し改善し続けようとする教師の態度をより向上させる。それにより、皆が共に考え、創造する学びを実現させる基礎をつくることができると考える。

４　研究内容

⑴ 児童に付けさせるべき学習の基盤となる力（話す、聞く、書く、体力、学習に向かう態度等を含む）を定めた研究チームを組織し、育成する手立てを仮定する。

⑵ 全教員が日常の指導の中で仮定した手立てを実践する。

⑶ 実践の経過を全教員で共有し、改善策を協議した上で更に実践を進め、全校で取り組むべき「児童に付けさせる学習の基盤となる能力」と、「そのための手立て」を決定する。

⑷ ６つのプロセス（しかけ、立場の表明、課題設定、対話的な活動、立場の再表明、変容の自覚）を基本とした問題解決型の授業づくりを行う。

５　研究の経過

⑴研究仮説に基づく授業研究

月	日	授業研究・全体会等
４	２６	全体会（校内研究について共通理解、チーム研究の進め方について）
５	２４	チーム研究会①　助言者　教育指導課　副参事兼主任指導主事　日向端　聖　氏
６	２１	チーム研究会②　助言者　教育指導課　副参事兼主任指導主事　日向端　聖　氏
７	１９	チーム研究会③
８	２１	全体会（中間報告の進め方）、チーム研究会④
９	４	中間報告会　　助言者　立教大学　教授　大石幸二　氏
１０	２５	チーム研究会⑤
１１	２２	チーム研究会⑥
１２	１３	チーム研究会⑦
１	１７	研究報告会　　助言者　教育指導課　副参事兼主任指導主事　日向端　聖　氏

⑵一般研修

月	日	内　容・概　要	講師・概要等
９	４	認知機能トレーニングについて	講師　立教大学　教授　大石幸二　氏
９	２７	検査分析を生かした指導の改善について	各種検査の結果を分析し、指導計画の具体的な改善案を検討、共有する。

６　研究の成果

聞く、書く、集中力・姿勢、認知機能の４つのグループに分かれて研究し、実践することを通して、集中力、聴き方、自分の思考の整理の仕方など、子どもたちが学習の基礎となる力を身に付けることができた。教師一人一人が研究に対して目標をもち、授業実践をすることで、児童と教師がともに成長し、学ぶ基盤づくりをすることができた。

７　研究の課題

⑴ 学習の基礎となる力の育成はできたが、聞いたことの内容理解が苦手な子が多く、対話的で深い学びには至っておらず、来年度は具体的な授業研究が必要である。

⑵ 教師一人一人が研究に対して目標をもって進めることができたが、グループの中での共有、また全体での共有が難しかった。今後、授業のどの場面に重点をおいて研究していくかなど焦点を絞った研究が必要である。

（記入者　下野　由佳子）